

小
町
草
紙

小町草紙

種となれり一種
となせりの誤か

神佛のたまふげ
—神佛より人に
給はる偈の意に
や

有あく無あく—
有惑無惑の詛か

そもく、清和のころ、内裏（だぶり）に小町といふ色ごのみの遊女あり。春は花に心をつくし、秋は月の前の雲を厭ひ、あしたに一さいの曙のけしきを眺めて、言葉の種（たね）となれり、ゆふべには哀れをさそふ鐘の聲、つくづくと世の中を思ふにも、たゞ夢まほろしの心地して、草葉における露衣（つゆごも）、尙あだなるは命なりと思ふにも、日本の歌（にほん）の道ほど、もてあそぶべき物はなし、よろづの言の葉となりにけり。歌の徳あまたあり、世の中の憂きにもつらきにも詠じ、神佛（かみほこけ）のたまふけにもなり、又は力をも入れずして、天地（あめつち）を動かし、目にみえぬ鬼神（おにかみ）をもあはれと思はせ、男女（おとこをんな）の中をもやはらけ、猛きものよふの心をも慰むるは歌なりとて、この小町は歌をよむこと勝（すぐ）れたり。

いにしへの衣通姫（そとほりひめ）の流（ながれ）とも申し、観音の化身とも申す。かりにこの世にうまれ給ひて、有あく、無あく、衆生の、まよひ深き女人、餘りに心もなき者の、あはれをも知らず、佛を

も禮せず、神をも拜ますして、いたづらに月日をおくり給ふことを悲び、色ごのみの遊女とうまれ、飛花落葉の世の中、ひとたびは榮え、ひとたびは衰ふ。妙なる花の散りはてて、苔のしたに朽ちはつる有様をみせ、よろづの心にまかせぬ言の葉を、空ゆく月のくもりなき夜も、しぐれの空のたち迷ひて、さはりとなれるをも、これにて眺め、これにつけても歌の姿、人丸の歌に、

ほのくくとあかしの浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞおもふ
と詠じ給ひし歌も衆生のためなり。明石の浦とは衆生の迷ひの心なり、島がくれゆくと
は三界流轉の心なり、舟をしぞおもふとは、大慈大悲のあはれみ給ふ心なり。されば神
世には、あらがねの地つちにして、素盞すきのつゝみこ男尊より起りける。いまだ文字も定まらず、すなほ
にしてことの心もわかまへがたし、人の世となりて文字もさだまりぬ。こゝに出雲の國
に八色の雲の立ちけるをよみ給へり。

八雲たつ出雲八重垣つまごめに八重垣つくるその八重垣を

これよりして文字のかす三十一字に定まりぬ。花にあそぶ鶯、水にすめる蛙までも知れり。ましていはんや、人としていかでか歌をよまざらん。三十一字はこともおろかや、如

御さうみやうし
誤脱あるべし、
意義通ぜず

來の御さうみやうし、されども一の御さうはあまりに申しだすも恐れなりとて残し給へり。されば歌をよくよめば、佛をつくり、供養したてまつり申すと同じ。わるくよめば、佛をつくり損そんざすると見えたり。又小町は男にあふこと、まづ千人としるしたれども、あうて逢はぬとも見えたり。かたちのよきこと、李夫人、衣通姫にも異ならず。見るもの、聞くもの、これを偲ぶこと筑波根のこのもの繁きこと數を知らずして、ありし事も今は淺香山の淺ましき身となり、難波津にさくやこの花と、さかりにありしことも失せはてて、あはれ催す秋の野に、鳴く虫の聲までも、わが身のうへと思ひつる、いつまで命の露、草のいほりに宿りして、昔をしのぶ草の垣にしけく、露のおちぶれいでたる我身かなと、硯をならし筆をそめて、藻鹽草のすける道とて、八そぢあまりにてかき集めたる水莖のあととはかなく成りゆく世の中に、長らへはつべき身ともなきに、などかは人の願はざるらん、知らずしてつもれることは罪の業わざをしづのめが、明くるをも知らず、只いたづらに年月を、つくも髪のをれらが有様は、かほどに鶯の音にはや夏にうつりきて、次第々々よわりはてたる身なりけり、さりながら心は花になりにけり。

色につき香にふけることは、いにしへよりは勝まさりつよと思へども、かへらぬは老の波の

ちりぐ袖やしほるらん、戀しの昔や、しのばしの心や。いにしへはかりに住みにし宿ま
でも、玉をみがき庭には瓔珞やうらくをかけ、戸には水晶をつらね、臥し待つ月の床とこのうへには、
花のにしき、玉をつらね、戸をそばだてて、枕の塵を拂ひ、心にかゝる人あまたねて
狂言綺語きやうきんぎよの身なれども、今は只朽木の柳いとどしく、姿は女の歌、此小町が歌は衣通姫
のながれなり、あはれなるやうにて強からず。さればよみし歌にも、

思ひつゝぬればや人の見えつらん夢と知りせばさめざらましを
またうたに、

色みえでうつろふものは世の中の人の心の花にぞ有りける
と詠じ給ひしも、けにことわりと詠みしなり。今も思ひあはすれば、業平の歌に、
月やあらぬ春や昔の春ならぬわがみ一つはもとの身にして
とえいじ給ひしもけにことわりと、口ずさみして泣くより外の事ぞなき。身の有様を思
ひつゞけてかくなん、

わびぬれば身を浮草のねを絶えてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ
かやうに詠みおける言の葉までもあはれなり。今は只たのむかたとは、南無大悲觀世



音むかへさせ給へとて念じつよ、ありがたや、は
や行末は近く、なぎさの法の舟うかぶ、たより
は六つの文字、唱ふる聲はひまもなし、いかで
か諸佛も助け給はざるらんと思ひつよ、をりふ
し小野の細道かきわけて、草のとほそをうちな
らし、いにしへの色好みの小野の小町はこれに
渡らせ給ふかとはれければ、はづかしや、こ
はそも夢かうつよか幻か、いかなる人にてまし
ませば、いやしき柴の戸に竹の柱のふしどころ
をば問はせ給ふは、こなたの事か、よそのため
か、何事ぞや、よくく思へば同じ色好みの、な
さけも殊に在原の、おもかけは業平の、あらは
づかしわが姿、さしもこそ、花の姿の袖かさね、
にほひも深き梅衣、たち姿は女郎花の、露おも

けなる心地して、おちぶるうちにも誰にか靡かんと、うしろめたくも思ひしに、いつのまに變りはてたる花園の、かれんくなる草の葉をとぶらひ給ふは不思議さよ。その歌人の色にふけりしこと、かすを白玉の、手にとる文のかす數多ありしかども、身のはてしまではなさけのつまは無かりけり。

ありがたの在原や、これこそよき便なれ、いで過ぎにし愛念のうちをかたり申さんと、恥しながらいくへふたすきかけて、頼みはありそ海の底ひなく、懺悔申さんと有りければ、涙にむせび給ひて、業平仰せけるは、さらぬだに女は罪ふかくして、業障の雲あつく、眞如の月も晴れやらず、心の水も濁りつと思ひと思ふことは、悪業煩惱の絆なり、されば佛も經に第一嫌ひたまふ、しかりとはいへども、男なくして女なし、佛なくしては衆生なし、愛別離苦のことわり、皆目の前ぞかすと語り給へば、小町は手をあはせて禮し、その後懺悔をかたりけり。それ戀路にまよひし人は、第一にみかどの御歌、第二に貫之が玉章、さては花に結びし文もあり、あさがほの黄昏時のふみもあり。よそめを包むふみも、涙おとしたるふみも有り、岩もる水のふみもあり、うきを名をしどりの文もあり、寛の水の文もあり、つまのをじかの文もあり、うらみを葛の葉のふみも有り、た

いくへふたすき
—いくゆふだす
きの誤にて、幾
多の木綿禪の意
にや

ますだのいけみ
―益田の池を、
生けみ殺しとか
けたり
鮎包焼き―鮎の
包焼は近江の名
物なり、それを
焼きすつるとか
たりけ

なばたの逢瀬の中のふみも有り、妹背の中のふみもあり、思ひあかしの文も有り、宇治の柴舟のふみもあり、戀をするがのふみもあり、富士のけぶりの文もあり、難波津の細道たえし身をつくしのふみもあり、すみよしや、きくに人なきふみもあり、濱の眞砂のふみもあり、よみつくしえぬふみも、歌にそへたるふみもあり、やどりの文もあり、おもひますだのいけみ殺しのふみもあり、堅田の鮎包焼きすつるふみもあり、阿漕が浦にひく網の、目にあまりたるふみもあり、藻にうづもれしたまがしはの文もあり、あはれみても兒手柏の文もあり、蓬生の宿とかきたる文もあり、淺香の沼のかつみぐさ、かつ見しより思ひの種と書きたるふみもあり、珍しき初雁がねのおとづれのふみもあり、うはの空にも聞くやいかにと書きたるふみもあり、さよがにのいとはかなき文もあり、逢坂山のさねかづら、くる人もなきふみも、おほつかなくも呼子鳥のふみもあり、八つ橋や、蜘蛛手にちかひたるふみもあり、へだてもあらじ杜若、色紫のふみもあり、箒木のよそながら見し文もあり、風のたよりの文もあり、細谷川の丸木橋のふみもあり、室の八島に立つけぶりの文もあり、野中の濟水とかきたるふみもあり、雪のしたがさねの、紅染のふみもあり、われ知らぬふみもあり、山時鳥かまほしさは一聲をと、戀ひそめし

みづからが、衰へはてたる有様、譬へんかたもなき心なりとて、又袖を顔におしあてければ、業平、むかしを忍び給ふなよ、逢ふは別れのはじめ、生るとは死すべきはじめ、ただ水の泡なる世に、何事をいま語り給へる、ふみのかずを打忘れ、思ひしことを拂ひすて、南無西方極樂世界へ迎へさせ給へと念じ給ひて、わが苦患くげんをものがれ、馴れにし情なさけの人をも助け給へと、在原の業平くどき給へば、小町、いよく心をひるがへし、あら嬉しの御詞ぞや、生死しやうじ流浪の迷ひの道しるべ、教へ給ふことの有りがたさよ、よくく思ひつゞくるに、妄執まうしやくの深きは女人なり、観音とも、地藏とも、御身を頼み申さんとありければ、まことの道を願ふこそ、佛も慈悲を垂れ給へ、われも過ぎにし古事ふることを語りてきかせ申さんとて、同じ懺悔をし給ふ。われも心をうつし、身をすてて色ごのみは數かずをしらず逢ひ馴れしかども、その中にも思ひとめしはわづかなり、以上十三人、第一染殿そめどのの後のち、第二には紀の有常ありつねがむすめ、第三には齋宮さいぐうの女御なり、そのほか伊勢物語にかきつけし筆のあとに見えぬべし。

みづからも千人としるしたり、これ皆いつはりの情なさけなり、まことに妄執まうしやくの雲晴れにけり、などか成佛じやうぶつならざらんや、されば世の中のさだめしことは定めありと、むばたまの

たゞそふりたゞ
よふの行が

さてしもあらざ
るゝさてしもあ
らざればの行か
そんをひろげ物
をたて給へゝそ
ぞをひろげ物を
たべ給への誤に
や

夢につたはりたることわり、明けくれ思ひすつる言の葉、誰かは老の坂を越えざらん、の
がるべき道もなし、花もさすが答めるうちに、嵐はけしくして、さそひぬる時もあり、入
らずして雲にたゞそふ月もあり、これ生死しやうじの境さかひにひとしくして、よろづ身のうへと思ひ
ける、ある歌に、

世の中を何にたとへんあさほらけ漕ぎゆく舟のあとの白波

とよまれけるも、ことわりなりと思ふにも、ひまもなくして、浄土を願はざりけり、い
かでか馴れにし人も助からざるべき、みづからも狂言綺語きやうきぎよのことわりをふり棄てて、大
悲をたのみ申すべしとて、かき消すやうに失せにけり。不思議ふしぎやな、夢にたはぶれつる
心して、ゆき方しらず歸りたまひし面影を、かい見えさせ給はずて、うせ給ひつるは、是
は業平にてはましまさずや、観音菩薩と思ふなり。さてしもあらざる草のとほそ引きた
てて、又里へとて出でにけり。こゝやかしこの門かどに立ちて、そんをひろげ物をたて給へ
と、聲をあけて立ちるたり。見る人ごとに、いにしへの小町がなれる姿を見よやと有り
ければ、集りこぞりてさよやきける。

あさましや、あまりに都のほとりは、われを知らぬ人もなしとて、足にまかせて、足曳の

山路をたどりのゆく程に、遠きあづまに思ひきぬ。をちこち人に問ひ給へば、はや逢坂山につきにけり。これやこの蟬丸せみまるのすてられし跡かとよ。たづぬれど小町に答ふる人もなし。たづきも知らぬ旅人を、とむる關屋せきやはあれども、小町をとどむる關守せきもりはなし。わが身一つのひとりごと、よしや人をも怨むまじ、たゞわが身のありさまを、ゆふつけ鳥の聲までも、泣く涙おちそひて、頼む力は竹の杖、ふすかとすれば草薙、枕となるは、この宿のなさけの人もなきまよに、立ちよる蔭は松のした、休みくゆく程に、鏡の山につきにけり。いざ立ちよりて、老の形をも見るやとて、しばしは足を休めつよ、いまは賤しき身とはなりぬれど、一首かくなん、

花の色もうつしとどめよ鏡山春よりのちの影もみるやと

かやうに詠じ、又小町、

人影もせぬものゆるゑに呼子鳥何を鏡の山になくらん

とうちながめて、人伴はねども、又とふ人もなければども、むかひの里につきにけり。さだめし宿はなけれども、雨はふりきぬ美濃の國、みののおやまの一つ松、語らふ友はまれにして、いそぎくぞ下りける。

いざ立ちよりて
云々古今十七
「鏡山」いざ立ち
よりて見てゆか
ん年へぬる身は
老いやしぬる
と」

あしや一葦間の
隈か

よびつぎの里一
原本「よひ月の
里」とあり、今
改む

草のこもと一草
のたもとの衍な
るべし

思ひきや美濃のお山の一つ松契りしことはいつもかはらじ

とよみしは、これはいつはりなり。契ることはかはりきて、月よりほかの友はなし。は
や行末ゆくすゑはみのをはり、何となるみの潮干がた、あしやをさして鳴くたづの、ゆふべの聲
までも身のうへかと、潮汲むあまの衣ころもほすまもなき、わが袖かなとあらそひて、こよや
かしこを打過ぎぬ。もしもやわがよびつぎの里もやあると聞きあたり。松風の里のあた
りさびしやな、さよ千鳥聲こそ近くなるみがた、かたぶく月にしほや満つらんと、八つ橋
の蜘蛛くらて手に物やおもふらん、一むら山や、みやぢ山、日もはや既にくれはどり、あやはか
なき身の、いつか身のゆくへをとほたふみ、さよの中山こえやすし、憂きにもかこつ命な
りけり、露の枕にかたぶきて、

たびねする木この下露したつゆの袖にだにしぐれぬるなりさよの中山

と詠じけるこそやさしけれ。いかなる罪のむくいにて、かよる憂き身の旅をするがなる、
宇津の山路をこえにけり。昔は夢かうつゝの山路を、あとも見えぬ薦の細道かきわけて、
草のこもともしをれけり。今はまた何をか身にも纏まとへんと、なくくおきつの濱千鳥、清
見が關につきにけり。富士の高嶺たかねに立つけぶりをながめ、漕ぎゆく舟をみほの浦、松原こ

ゆるしほけぶり、われは八十路ヤソチあまりの身なれども、いにしへの歌人うたびとのよみしことは、
なほもおろかと思はれて、かくなん、

清見瀉きよみこころに關はなかりけりおほる月夜のかすむ浪路を

又さいぎやうじの歌に、

風になびく富士のけぶりの空にきえて行くへも知らぬわが思ひかな

とよまれしも、今こそ思ひ知られたれ。さらぬだに物憂きことは東路の、埴生はにがの小屋こやの
いぶせきに、都の空を見て、けふはうき身を浮島が原にまよひ出でて、行きかふ人の道
しるべとて、たどり／＼行くほどに、ゆくへも知らず、はてもなき、武藏野のすゑにな
る、草葉におく露の玉銚たまはこの、道のほとりの早蕨さわらびを、折りてもち居たり。これもものうき
露の命たすけんために、ひちかけがさ、さすがにかけし武藏むさし鎧よろいと、古歌にも有るぞかし。
などか人の情なさけのなかるらんと、ゆふべ／＼の假枕、草の衣ころもに草むしろの、深き心はあら
ずして、日かず積れば陸奥むつの、しのぶの里にほど近し、都をば霞とともに出でしかど、
けふしら川の關にもつきにけり。ゆにや命ほどつれなきものはよもあらず、遠きあづま
の旅衣、きつと怨むるかひもなし。都にて身のむかしをみちのくや、しのぶの山のしの

さいぎやうじ
西行法師の誤を
るべし

さすがにかけし
云々―伊勢物語
「武藏鎧」すが
にかけ頼むに
は問はぬもつら
し問ふもうるさ
し―
都をば云々―後
拾遺能因「都を
ば霞とともにた
ちしかど秋風ぞ
吹く白川の關―

かけくまの松云
云「たけくまの
誤なり、後拾遺
季通「武隈の松
はふた木を都人
いかにと問はゞ
みきと答へん」
人ならば都の旅
云「伊勢物語
栗原の姉羽の
松の人ならば都
のつとにいざと
はましを」
くるしのの「此
歌誤脱あるべし
意義通ぜず
雪をいたゞきて
「此上に「頭に」
の二字脱せしか

ぶ摺、袖にもうつしとどめばやと、宮城野の小萩が花のむらすき、靡くけぶりは鹽竈しほがまの、八十島やそしまかけて千賀ちがの浦波、浅香の沼のかつみ草、緒絶そだんの橋や阿武隈川あふくまがはのわたりして、ゆきみの里のほど近し。はなかの櫻、かけくまの松の木立こたつもみきときく、あこやの松やあねはの松、人ならば都の旅にさそふべきと、よみし歌の枕まくらを、せめて筆にうつしても、見ばやと思ひし言の葉の、いまは目に見ることの嬉しけれども、いたづらに歌枕よむとても、たれか小町が歌とて、もてあそぶ人もなし。
くるしののいたづきやするこものてうありし昔に君をととける、
とありし歌の心かや。雪をいたゞきて、額ぬかに苦海の浪をたよへ、身には首くびまでおひずりをかけ、ねぶりのうちにも果てよかしと思へど、つれなく残る有明の、影も形も衰へていづくともなくあこがれて、細杖ほそづゑに草の衣ころもひぢにかけ、笠と簀と棄てもやられぬ身のはてしがなと思へども、いつの時をか待つべきと、歎き悲みけれども、さすがに惜しきは命なり。厭へども厭はざるをば老の坂、願へども叶はぬは和歌の浦のたづの聲かなと、年をへて今日はみちのくの玉造たまつくりの小野といふ草原に宿りして、あさなゆふなを暮しけり。岩木にもあらざれば、つひにはかなく露と消えにけり。あたりを見れば、草ふかく繁りあ

をうの心一誤字
あるべし

名所みち一名所
みんなるべし

けふの郡云々一
後拾遺能因錦

木は立てながら
こそ朽ちにけれ

けふの細布胸あ
はじとや

かの小町は一
「は」は「が」の衍
なるべし

候へ一原本「候
ひ」とあり、今改
む

ひたる絲薄 よるく風の吹きにけり。をうの心あるやうに聞きにけり。尋ぬる人もな
きまよに、とぶらふかたらひ更になし。不思議やな、在原の業平は、歌の名所みちとか
や、けふの郡、織る細布の胸うちさわぎ、かの小町は朽ちはてしあとをとぶらはどやと
思ひしが、しばし心にうかどはせ給ふことありて、休らひ給へば、歌の上の文字、吹き
くる風につたはりて、

くれごとに秋風吹けばあさなく

と、さやかに聲の吹きければ、業平、下の文字をつぎたまふ。

おのれとは言はじすよきの一むらと詠じ給へば、いづくともなく、みめかたちいつくし
き女房出でて、いかなる人にてましませば、この草むらに立ちよりて、歌の下をつけた
まふらん、これこそ古いにしへきこえし色好みの小町が老い衰へて、白骨となりて失せにしあと
にて候へ、もし都人にてましまさば、かやうなる所ありと、業平にかたり給へとなり、そ
れをいかにと申すに、業平はなさけも深き慈悲の人にてましませば、さて小町はこの世に
はや無きかと聞かせ給はど、とぶらひにもありぬべしと、業平とは、業ごふをたひらむると書
きたれば、おのづからこの業平を呼びたてまつれば、悪業あくごふも皆消えにけりとなり。業平、

如意輪—傍訓原
本のまゝ

これはたしかなる幽靈なるとして、草叢くさむらをかきわけて見たまへば、女はなし、たゞ白骨と薄一むら生ひにけり。これを見たまひしより、いよく世の中のあはれ、人のうへと思ふことをば、いかにも山坂を隔ててもとひ給ふべし。

此物語を聴く人、まして讀まん人は、すなはち觀音の三十三體をつくり、供養したるにも等しきなり。小町は如意輪觀音にょりくわんおんの化身けしんなり、又業平は十一面觀音めんくわんおんの化身なり、あだにもこれを思ふべからず、南無大慈觀音菩薩と回向あるべし。